



オビア、キリスト教、カルト：ジャマイカ黒人の世界観

長嶋, 佳子

柴田, 佳子

(Citation)

黒人研究, 60:12-14

(Issue Date)

1990

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001826>



オビア、キリスト教、カルト——ジャマイカ黒人の世界観

長 嶋 佳 子

ジャマイカの黒人と一口に言っても、皮膚の色の度合、容貌、階層ないし階級、居住地域等による多様な世界観が展開しているが、一応一般的にはオビア（obeah）、キリスト教、カルト（cult）が彼らの世界観の基本柱になると考えてみたい。

彼らの大多数はプロテスタントを中心とするキリスト教徒であり、しかも正統派を自称する。しかしこれらのキリスト教で、欧米直輸入そのままのものは、決して多くはない。例えばローマ・カトリック教会では、ミサに民族音楽や舞踊を取り入れているところもある。太鼓やギターを使い、軽快でリズムカルなジャマイカン・リズムとハーモニーや呼応形式（call-and-response）も採用し、また話し言葉パトワ（patois, English creole）も入り、民謡のメロディーをふんだんに取り入れて新しく作詞作曲された賛美歌を歌っている。クリスマスやイースター等の大きな行事では、民族舞踊の動きやステップを使ってオリジナルに創られた舞踊も、各々の目的に適わしいテーマで展開しながらミサの中で踊る、といったプログラムをとっている教会もある。プロテスタントの中でも、この国最古の福音派のモラヴィア派等で、礼拝の一部としてはそのような試みを取り入れなくとも、教会内でアフリカの文化を豊富に使った舞踊やミュージカルを、若者を中心に演じさせている。ただし正統派の教会の多くは、むしろ普遍性を強調し、極端な形で民俗文化の導入を避けたがる傾向はある。

黒人系に最も人気のあるバプティスト系やメソヂスト系、そしてそれらから派生して分離独立した教会、アフリカン・メソヂスト監督教会、米国やカナダから移入されたチャーチ・オブ・ゴッドなどのペンテコステ系では、かなり黒人系独特の表現が見られる。例えば熱狂的な牧師の説教、祈りや民衆の詞し、非常に

情緒的な賛美歌の歌い方、霊的高揚と即興的な応答、トランスや一部ではスピリット・ボゼションなども儀礼中に見られる。これらの教会に集う人々は、聖霊の力を強く信じ、また体験しているが、これについては、一部の正統派の福音派にも共通している。このような体験主義的信仰を重視する点も特徴的である。

大多数はこのようなキリスト教的世界観の中に生きているが、オビアやカルトといったアフリカ的な要素をもつものとも完全に切り離されているわけではない。ただ社会の表面上に頻繁に出てくるわけではなく、むしろ表面下で、裏側で息づいているものである。これらは実は個人の中でも、共同体の中でも共有しうるし、またしてきた。概念、信仰、あるいはイデオロギーとしてキリスト教とは相入れない、排除されるべきものと見做されはしたが、実際はうまく使いわけられたりしてきたものと考えられる。

オビアは妖術と邪術を合わせたような、おどろおどろしく、いかがわしいものだが、民俗科学的側面ももってきた。現在では直接関与する人は多くないようだが、一般に困惑、怒りや噂や嘲笑を買ったりするので、公然とは行なわれにくい。超自然的現象に関係し、しかも社会的制裁を伴うこともある。語源的にはアカン語の“Obayi”、トゥイ語の“Bayi”、つまり妖術である。一般には、他人に危害を加える目的をもった個人的行為で、オビアマン、オビアウーマンと呼ばれる専門家が、依頼人から金品の報酬を得て行なってきたものである。専門家は奴隷制時代では特に、アフリカの伝統的な知識や知恵が豊富な賢人、または哲学者でもあった。さらに薬草などの知識に長けた医者や、司祭的役割も担った重要人物であった。畏怖と尊敬の的となり、能力や霊力を高く評価され、その影響力が大きかったため、奴隷コミュニティのリーダー格ともなった。し

かし必ずしも好かれてはいなかった。

彼らは死霊と交流し、影 (shadow) と呼ばれる魂の一部を捕まえて、相手をもぬけの空にすることさえできた。戦時には、好機を教え、護符を与え、敵を弱める儀礼も行なった。かつてマルーン (maroon) の女王ナニー (Nanny) が、英軍との戦争で銃弾を50発受けても平気だった話は有名であるが、公文書でもナニーがオビアウーマンだったと著されている。さらに奴隷の間の犯罪を防ぎ、あるいは発見し、処罰する機能も果たしていた。

オビアをかけられるのは、非難されやすい人、他人をさしおいて成功し、羨望や嫉妬を買う人、瀕死の老人、病人、貧乏人、孤立した人などの厄介者、社会的弱者が多かった。オビアは彼らを除去したり、平準化することで、集団内の緊張を緩和することができ、必要悪的な制度機構であったと言ってよい。一方で複雑な人間関係の問題処理を依頼され、その時に情報を得て、また自らも情報獲得のネットワークを張りめぐらし、人間関係の裏まで知ることができたので、相談役、顔役、裁判官、警官、さらに刑罰執行人も兼ねていたほど、多様な役割を果たしてきたのである。

精神的疾患を含む病気やケガの治療にもあたり、不幸一般も含めてその原因究明、処方箋は確かだと信頼されてきた。ただし常に問題の処理が成功するわけではない。必要経費、謝礼が多額なためもあり、悪評判のオビアマンもいる。しかし、超自然的現象、財産や生命の危機をもコントロールすることができると恐れられており、依頼者が、普通的手段で解決できない問題に直面した時は、出費を覚悟で相談、依頼に行く。それでオビアマンたちはますます私腹を肥やすことができ、これを陰でやはり噂し、妬みもするという構図がある。このような観念や行為は白人にとって脅威でもあったので、奴隷制時代から、例えば白人の死を願っても、想像しても極刑にされ、禁じられたことがあった。しかしさほど効果はなかったのである。

ところで幽霊やお化け (死霊ダッピー <duppy>、バグブー <bagaboo>、ローリン・キャーフ <rollin' calf>) などに出会った、不思議な物音を聞いた、あるいはうち続く不幸、身体的不調、肉親の死などについても、

常識的判断で納得も解決もできないとき、しばしばオビアが原因だとされる。確かにオビアに関わる人々もまた全知全能、普遍、遍在のキリスト教の唯一神を信仰し、神やイエス・キリスト、聖霊、聖書中の有名人物、聖人の名を呼び求めたりもする。しかし他方で、オビアの世界、死霊や小さな神々などの方が、より直接的影響をもたらすと信じている。

カルトとは、アフリカの民族宗教が、奴隷たちの間で相互に混融合しつつ、その完全な実践を許されなかったために、取捨選択されて再編成される過程で、白人のもたらしたキリスト教の影響も受けて変容してできたものである。それらは多様で、ヴァリエーションは常に作られていると言っても過言ではない。これらを、キリスト教とアフリカの伝統性を両極にし、その混在度、キリスト教の影響度を示標に、スペクトル状のモデルに当てはめて考えることもできる。キリスト教の極に近い所には、アングリカンをはじめ正統派の諸教会、新来のペンテコステ系の教会、そしてアフリカ的な独自の解釈を施しながら独立した土着派教会と並び、徐々にアフリカの伝統を表わすものが続く。先述の要素の他、夢語り、幻聴幻視、異言、信仰治療なども行なわれる。

土着派での水による洗礼は、西アフリカでの水や川の神霊との関連の方がキリスト教の影響より強い、とさえ指摘されている。太鼓などの打楽器音、大声、奇声、唸り、叫びといった音の饗宴とも言える儀礼が中心となり、ダイナミックな動き、舞踊もきわめて重要な役割を果たす。即興的応答も奨励され、色彩にも象徴的意味が付与されている。もちろんこれらをユダヤ＝キリスト教的伝統の一部の再解釈と考えることもできなくはないが、パフォーマンスの表現形態からみると、それは明らかに「アフリカの」伝統、と解釈した方がよさそうである。

ジャマイカでは奴隷制廃止後、労働力補充のため年奉公人として連れてこられたインド系は人数的にも多くないため、文化的影響もさほど大きくはない。しかし例えばリヴァイヴァリズム (Revivalism) と総称されるカルトでは、インド文化の要素も見られる。リヴァイヴァリズムは、自称キリスト教徒、あるいは

「バプティスト」であるが、コンテキストに応じて「リヴァイヴァリスト」とも使い分ける。彼らの儀礼には病氣治療、悪霊祓い、教会新築や改修の感謝、福音宣教（犯罪の悔改めと回心）、洗礼、キリスト教暦に合わせた記念などの「良い」目的と、オビアに近く、他人に危害を与えんとする「悪い」目的がある。彼らの中には日常的にも断食や祈りを頻繁にし、信仰深い生活を送っている人が多い。

パコマニア（Pacomania, Pukkumina）は、やはり若干インド文化の影響も見られるが、リヴァイヴァリズムよりもアフリカの要素が濃く、アフリカの神霊が憑依したりする。儀礼の中の音と動きにおいて、特にアフリカ的である。クミナ（Kumina）は「最もアフリカ的」と言われるコンゴ系の祖先崇拝であり、キリスト教の影響は否定されている。

これらのカルトは時代が新しくなるにつれて衰退し、統計では人口の1%未満しか占めていない。それでも1960年代以降の政府の独立国家としての伝統文化の見直し、及び復興政策により、国民文化祭などではコンテストに組み込んだり、学校や地域ぐるみで、パフォーマンス化して継承している。

1930年生れのラストファリ運動（Rastafarian Movement）は、当初黒人のアフリカ帰還運動、意識高揚運動としてのガーヴェイズム（Garveyism）、エチオピアの故ハイレ・セラシエⅠ世への特別な尊敬（多くは崇拝も）、黒いユダヤ人／イスラエル人としてのアイデンティティと世界観などが結びついたもので、独特の生活様式を展開してきた。長らく体制側の執拗な弾圧に会ったが、レゲエ（Reggae）などの芸術を通して世界的な民衆の英雄を世に出すにつれ、彼らの信仰や実践も積極的に良い面を見直されてきた。現在ではジャマイカのサブ・カルチャーとしてさえも受け入れられる傾向が強い。それだけ、一般の住民の間でも理解が増し、また部分的にしろ採用され、受容されていることを示している。

以上の三つの要素は、ジャマイカ社会という空間で、ジャマイカ的、クリオール的な文化の生成と展開過程の中で、黒人系のオリジナルでダイナミックな創造的行為の所産だということもでき、彼らの世界観が凝縮されていると言っても過言ではないと考える。

これら三つの縦糸をつなぐ横糸として、音、動き、祈りを挙げたいが、シンポジウムでは時間の都合上カットしたため、別稿にて扱う予定である。 □

